

いちごの故郷 小諸市いちご平

小諸城址、懐古園の南西絶壁の上に有る展望台より眺めた千曲川の風景-----

小諸なる古城のほとり、雲白く遊子悲しむ、-----

島崎藤村の石碑にふさわしい千曲川の光景が、旅人の旅情をさそい信州小諸のイメージを代表する観光風景となっております。この展望台から眺めている、千曲川対岸の崖の連なる上の大地が 御牧ヶ原 であり、その中に いちご平 が有り明治時代から昭和初期にイチゴの大産地だったのです。

島崎藤村の学んだ小諸義塾の学長の本村熊治がこのイチゴジャムの産地に製管技術で貢献した歴史があり、しなの鉄道の小諸駅前より、いちご平行き J Rバスが運行していたのですが、幾年か前に廃線となってバス停だけが昔の面影を残しています。いちご平の歴史をさかのぼって行くと、大変興味深く、御牧ヶ原 を取り巻く周辺地域の栄枯盛衰の歴史と、古代のロマンに駆立てられるのです。

御牧ヶ原は日本いちごの発祥の地といわれ、人類の歴史は石器時代、縄文時代よりの史跡があり、平安時代には駒の里望月をはじめ、官牧となっていたのです。

平安時代の官邸の人々が多くの 駒迎の歌 を残しています。

ひきわくる駒そいわゆる望月の 御牧ヶ原や恋しかるらん (源 俊頼)

年を経て雲の上に見し秋の かげを恋しき望月の駒 (後嵯峨院)

御牧ヶ原の北西部に千曲川まで突出した断崖に、布引山釈尊寺が有り、100m以上高い連続した岩壁に白い岩が、布をたなびかせた様に見えて、布引と呼ばれますが、牛に引かれて善光寺参りの伝説は、あまりにも有名です。

とくとくと 落ちる岩間の苔清水 汲ほすほどもなき住居かな (西行 法師)

岩壁の上の釈尊寺観音堂内に安置された、鎌倉時代の宮殿は大変美しく、国の重要文化財となっています。そして明治時代になって、御牧ヶ原に、いちごが原生していた事が記録されている。この当時の盛況が 御牧原音頭の歌詞の中に歌われております。

----- ハアー 乙女心が御牧のいちご赤い顔して下を向く

ホレサ よいとこ よいとこ 御牧ヶ原----- (作詞 小山夜潮)

そして、昭和になって、この御牧ヶ原の原種は日本各地の試験場等において品種改良の親株となって品種改良がなされていきました。他県に渡って、今日再び

いちごの故里に戻ったいちごが、宝石の様に輝いて真っ赤ないちごの実を、実らせています。

こもろ布引いちご園のハイテク技術はまさに、いちごの眠っているDNAの能力を最大限に引き出す様に、農業の最先端技術を集めて研究し、植物工場としての技術を世界に向けて、発信しております。

2016年7月30日

こもろ布引いちご園(株) 倉本 強